

中学校美術における人物表現の授業実践について

徳永 七海^{*1}・平田 季雄^{*2}・中野 良寿

About a practice of the class of expression with the form of the person
in junior high school fine arts

TOKUNAGA Nanami^{*1}, HIRATA Suelo^{*2}, NAKANO Yoshihisa
(Received December 21, 2018)

キーワード：中等教育、美術、人物画、イメージマップ

はじめに

本稿は中学校美術における人物表現をテーマにした授業実践の一事例をまとめたものである。美術教育の分野においてもっとも身近なモチーフの一つである「人物画」、「自画像」について、初等教育から中等教育に至る美術教育の単元を見ても、人物そのものをテーマにしたものは意外に少ないのが現状である。本授業を行った徳永七海は、生徒自身が、それぞれ自分の写真を撮影・プリントアウトし、トレースして画用紙に線描を描かせた。また、その上に自分の内面を自己分析して水彩絵の具を使い、造形的な形や色彩を施す課題とした。人物そのものを写実的に描く、描画力の訓練としての写実画とは違うタイプの自画像、いわばイラスト的な自画像を描くことを提案している。以下に授業の実践内容の概要を記載することで、今後の発展的な教材化の可能性を示唆できたらと思う。

1. 中等美術教育における人物表現の授業の実践（徳永）

人物表現は生徒たちにとって親しみやすいモチーフであるが、同時に描画力が問われるとともに、自画像制作については自己の内面を探ることも求められるモチーフである。それ故に、あまり真剣に内面に取り組みたくないという感想を持つ生徒も少なからずいるテーマである。本章はこの人物表現について徳永が中心となり授業を行った実践報告である。平田、中野についてはその授業についての助言や指導を行なった。

1-1 課題設定の理由と目的

生徒たちにとって親しみやすい表現の一つに、人物表現がある。特に、自分自身と向き合うことのできる自画像制作は、自分という存在を改めて見つめ、これからの自分に思いをめぐらせるという点で、生徒自身を成長させる題材であると考えられる。しかし、自画像を制作することに対しては苦手意識をもつ生徒もいる。そこには主に二つの理由があると考えられる。一つは、絵を描く技術に自信がないためである。バランスのとり方や細部の描き方など技術面に不安があり、自分の思い通りに描けないという生徒がいると考えられる。

自分の思い通りに描けないもう一つの理由は、自分と向き合うことへの抵抗感や、自分の弱い部分を認めることの怖さがあると考えられる。自分の特徴や内面を自画像で表現することに難しさを感じている生徒の背景には、このような原因があると考えられる。

そこで本単元では、自画像制作で一般的に用いられる、鏡を見ながら描く手法、また写真を見ながら描く手法ではなく、写真をトレースして描く手法を採用した。こうすることで、技術面に不安を抱える生徒でも制作に意欲的に取り組めるようにした。また、絵画的な表現ではなくイラスト的な表現を取り入れることで、より生徒が自画像制作に親しみをもてるようにした。自分と向き合うことへの抵抗感という点に関しては、

*1 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第47号 (2019. 3) *2 山口市立湯田中学校

イメージマップ（図1）を採用し、趣味や部活といったところから、徐々に自身の内面に迫っていきけるようにした。その際には友人たちと話し合う時間を設け、自分だけでは気付けなかった自身の特徴についても考えられるようにした。

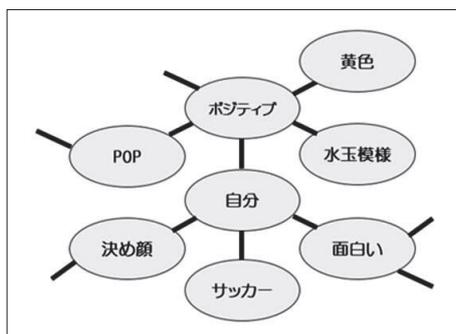


図1 イメージマップ作例

（中心となる自分の吹き出しから始めて思いつく様々なキーワードを連想し、吹き出しに記入していくイメージマップの手法は学習支援ツールとして使われる事例も多い。思考を放射状に広げて自己を俯瞰的に見つめるきっかけとする。）

1-2 授業内容

まず導入では、生徒たちにとって馴染みの深い画家やイラストレーターなどのアーティストを取り上げ、作品制作に対する意欲向上に努めた。次にイメージマップの作成をし、自分を表現するために必要なポーズやモチーフ、色などを考えた。そして生徒間で写真撮影をし、その写真をトレースしながら制作を進めた。

この際、必要な線と不必要な線を考えトレースすることを伝え、場合によっては大幅なアレンジ（髪型の変更や新たなモチーフの追加）を自由に行うように指導した。これは外見のイメージだけでなく、内面のイメージを表現しやすくするためである。トレースし終え下書きが完成したら、さらに画用紙に転写し水彩絵の具で着彩をして完成とした。トレースや着彩の際には、自分で制作した例を提示したり、実際に黒板の前で実践して見せたりするなど、生徒が作品をイメージしやすいよう努めた。（資料1、資料2、資料3）

1-3 生徒の感想

今回全6時間の制作を終えた生徒の感想を大きく4つの観点から分類し、課題における利点と問題点について考察した。

① 水彩絵の具の技法的観点

- ・いつもは水彩画ではないので、うすくする必要はなかったけど、今回はうすくしないとイケなかったので、それを自分の思った色にすることが難しかったです。
- ・授業で水彩を使えたのがうれしかったです。
- ・私ができなかった、思いつかなかった色の塗り方、塗る場所など、新しい発見がありました。
- ・うすくキレイな色でぬれたと思う。

② イメージマップに関して

- ・イメージマップでたくさんアイデアがでたので良かったと思う。
- ・イメージマップを作成したら、自分の性格とかが分かって良かった。

③ 写真のトレースについて

- ・自分の姿をよく見てトレースすることができた。
- ・トレースが楽しくできた。
- ・どの線を残してどの線をのけるのか考えてうっせた。（図2）
- ・自分の写真をトレースしたら自分が自分じゃなく見えてすごく面白かった。
- ・すごく難しかった。

④ 完成作品について

- ・現実の自分に似てない気がした。
- ・おもいの他きれいにできていたのでうれしかった。
- ・自分の写真に合った配色をしたりデザインを入れたりすることに、よく工夫ができたと思うのでよかった。(図3)
- ・細かな所まで線を工夫できた。
- ・自分のことを見つめ直し自分がどういったことを思っているか、考えているかとか、どういった人間かを知るいい機会だった。
- ・これまで描いてきた自画像よりはとても良いものができたと思います。
- ・別人でしたが、まあまあ満足しました。
- ・影と線を大切にして、水で絵の具をうすめて描くという技術を身につけることができた。(図4)
- ・写真から自分の顔がどのようにできているのかをしっかりと理解することができた。
- ・しっかりと写真を見て輪郭や鼻などの細かいところを、時間をかけて描くことができたのでよかった。
- ・最後までアイデアをねって作成することができた。



図2 生徒作品



図3 生徒作品



図4 生徒作品

(1) 課題における利点と思われること

- ・生徒にとって身近なイラスト的な表現を用いることで、親しみやすいと感じた生徒も多かった。
- ・トレースすることによって、絵を描くことに苦手意識をもっている生徒でもある程度同じ進捗で制作を進めることができる。

(2) 課題における問題点と思われること

- ・トレースしたからといって本人そのもののように描けるわけではない。ある程度自身を観察して描くことが必要。
- ・トレースしたことによって、線が硬いような、不自然な線になってしまう生徒もいた。
- ・ポーズや表情、構成、色使いなどを考える時間をしっかりとる必要がある。今回は自身の内面と向き合うという自画像の目的はあまり達成できていなかったように思う。
- ・トレース、水彩、線での表現など、生徒にあまり馴染みのない手法が多かったため難しく感じた生徒も多かった。授業に取り入れる場合にはもっと丁寧に時間をとって説明することが必要であった。

1-4 考察

もともと自画像に対し苦手意識をもっている生徒が多かったが、今回のイラスト的自画像の授業で、イラストという生徒にとって身近な表現を用いることで、以前よりも満足のいくものができたという声も多かった。このことから、イラストで自画像を表現する手法は有効であると考えられる。しかし、「自分に似ていない」

や「別人だった」という声からも分かるように、自画像としての役割を十分に果たすことはできなかった。今回は時間の都合もありトレースを採用したが、トレースをする場合は、線の取捨選択について丁寧に説明する時間を設け、トレースしたあとは写真を見ながら手直しをするよう指導すべきであったと感じた。

2. 授業への取り組みを振り返って(平田)

人物画は、中学生にとってはどちらかというと抵抗感がある課題だと考える。

描いたものと目の前の対象とを冷静に見比べることができるようになる中学生にとって、静物や風景とは違い、自分自身にしろ友達や家族にしろ人物を描くことは、「似ていなかったら・・・」と不安が先に立ってしまうからだ。

人物画といっても、指導する教師が生徒のどの部分の成長を望むかで様々な取り組みが生まれる。過去に授業で自画像に取り組んだときには、「自分らしさを伝えるためには？」をテーマにして、人物の姿・形にこだわらなかつたことがある。まず、自分の写真を撮って参考資料にはするが、「自分らしさが画面に出れば、姿・形を描かなくてもいい」と伝えることで、人物画への不安を取り除いて授業を進めた。そこから生まれた作品には、上半身や顔を描いた作品もあれば、手や目だけを描いたり自分の好きな部活動の道具や趣味に関連する物を描いたり「自分らしさ」を表現するための様々な工夫が見られた。

今回実施した「中学校美術における人物表現」の授業にも、この人物画への不安を解消する手立てなど次のような工夫がみられた。

(1) 生徒は、写真の線をトレースすることで、負担感なく姿を描いていた。また、イラスト的な表現も通常の水彩画より取り組みやすかつたようである。

(2) 生徒にとってなじみの深いアーティストを導入部で使ったり、イラスト風に描いた自分自身の作品を紹介したりすることで、生徒の制作への意欲が高められていた。

(3) 学習プリントや映像による説明など視覚的に配慮された準備をすることで、わかりやすい授業になっていた。

学期末の慌ただしい中で計画したため、もう少しゆとりをもって指導ができたらと思う面もあつたが、特に次の3つの改善点をあげる。

(1) 制作の出発点となる写真撮影に十分な指導を行う。

人物の角度や画面へ入る大きさ、ポーズ、背景等、イメージマップをもとに完成イメージをもう少し固めてから写真撮影をした方が制作ももっとしやすく表現の幅も広がると考える。

(2) トレースの仕方に十分な指導を行う。

写真の上にトレーシングペーパーを置いて主要な線をトレースすることには、抵抗感なく取り組んでいたが、目の周辺をはじめどの線を選ぶかには多くの迷いを感じられた。トレース方法を身につけるための簡単な練習を取り入れることで、表情にも配慮した線での表現がもっとできるようになると考える。

(3) 完成作品(イラストレーション)の活用までを授業をする。

人物をイラスト風に制作することは、自分の経験上あまりないことであり、おもしろい取り組みだと考える。イラストレーションとしてとらえるのであれば、何に使うイラストレーション(目的)かも課題として与えることで、さらなる工夫の余地が生まれると考える。

おわりに

かつて1990年代には「プリクラ」と呼ばれる写真シール機が全盛の時代があり、コイン証明写真ブースの延長のようであるが、自分自身の画像を変形したり、部分的に修正を加えたり、タブレットペンで、花などの飾りを描き加えるというようなことが女子高生などを中心にプリクラの機械を通して行われていた。現在ではスマートフォンやタブレット端末などが、生活や学校生活の現場に普及して、以前の「プリクラ」的な

行為はスマートフォンのアプリにより、個人的にあるいは、仲間との遊び、SNS上でのやりとりなどライブ感のある方法で発展的に若者世代を中心に浸透している。

本課題ではこのような操作の容易なスマートフォン用のアプリケーションでのデジタルな画面の中での作業に慣れた世代が、あえて自分の姿形の表象である写真のシルエットをトレースしたり、内面を表す色彩や形、形態の変形などを行い、鉛筆と水彩絵の具を使って絵画を仕上げるといったアナログな行為をあえて行うという側面も持っているのではないかと思われる。スマートフォンを使った画像では端的に見たいイメージへデジタル加工により辿りつける反面、ありがたみも感じにくいのがこの種の写真だとすると、自分の手仕事を通して到達したいイメージに至ることの面白みや難しさ、技術的な向上心などを呼び覚ます可能性がある課題であったと言えるだろう。

本単元における課題の設定について、授業中の様子から伝わってくるのは、単に描画を進めるだけではなく、マインドマップを作るワークシートがあり、トレースする際に線描の取舍選択や描画の程度を指示するなど具体的な階梯があることで、生徒のモチベーションが上がってきている印象だった。自画像の作画及び、構想画を合わせるようなタイプの作品の制作であるが、陰影や色彩、作画上の参考資料の収集など、写実的な表現での完結が必要である絵画的な課題よりも、イラストやデザイン的要素の強い本単元のような課題設定は、描画力が乏しい生徒にとっても表現の幅を広げて、一種の達成感を感じさせることができ、そのことが、より写実的な描画への橋渡しとなる可能性もあるのではないかということが期待される。平田先生が述べているように、完成作品（イラストレーション）の活用までを含んだ授業をする工夫ができれば、今回の課題を活用した発展的教材を作ることができるのではないかと思う。

謝辞

本論文は、山口大学大学院教育学研究科の教職実践特別演習において、徳永の配属校である山口市立湯田中学校の指導教諭・平田季雄先生のご理解とご協力により、実践させていただいたものです。ここに改めて感謝申し上げます。

参考文献

- (1) 栢野彰秀・森健一郎：「イメージマップを用いた小学校教員の授業づくり支援の試み」、『島根大学教育臨床総合研究13号』，pp.125-138，2014.
- (2) 福田隆眞監修 山口県造形教育研究会研究部編著、『子どもの絵に学ぶ 絵から読み取る子どもの想い』，三晃書房，p.84，2018.

出典元

福沢諭吉肖像写真：西尾幹二，『[市販本] 新しい歴史教科書』，株式会社扶桑社，2001.

第3学年 美術科学習指導演

6月5日(火) 1校時

場所 美術教室

指導者 徳永七海

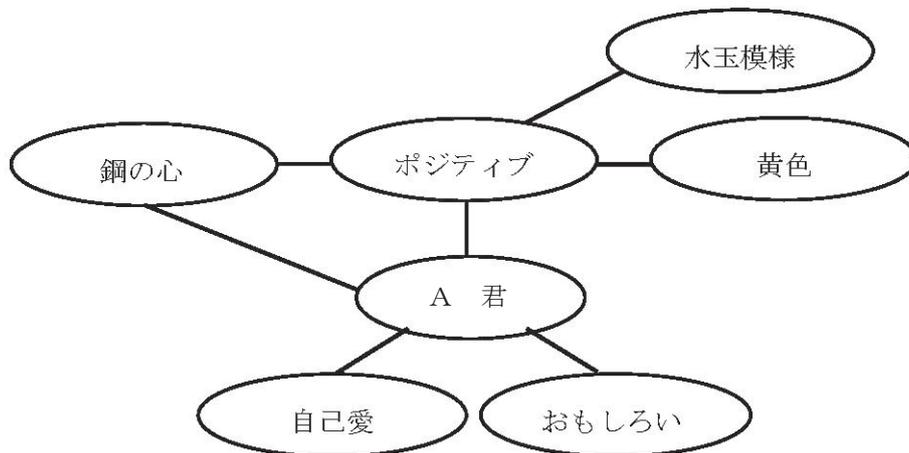
(1) 主眼 自分の特性について考え、自画像の構想を練ることができる。

(2) 準備物：ワークシート、デジタルカメラ

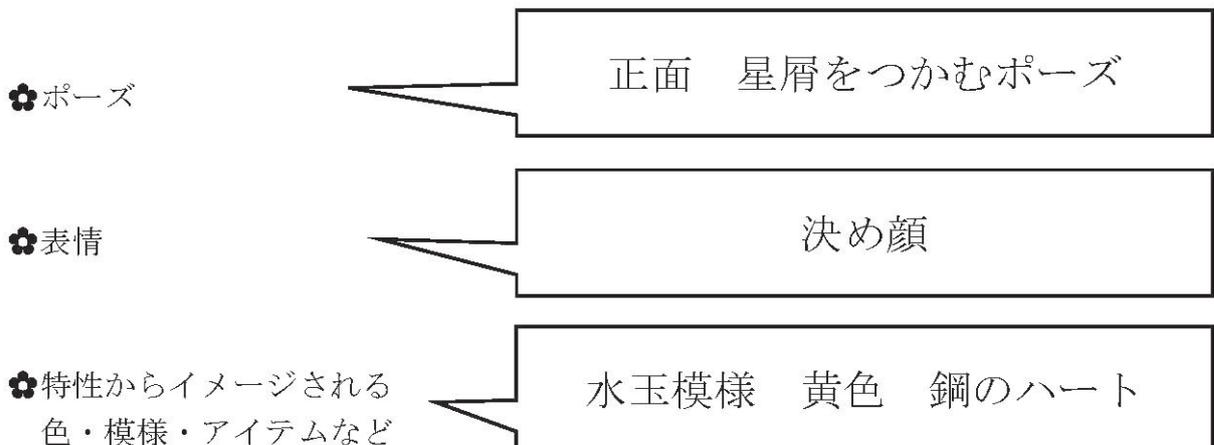
(3) 授業の過程

学習内容 および 学習活動	生徒の反応	教師の手だて
1. 線で描かれた人物画の鑑賞をする。(10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・知っている絵があるという生徒がいるだろう。 ・難しそうだという生徒がいるだろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・漫画のようなイラストから提示し、親しみやすさをもてるようにする。 ・参考作品として、芸能人など生徒の知っている人物の絵を提示することで、イメージを湧かせやすくする。
自分の特性について考えよう。		
2. 自分の特徴・特性をワークシートにまとめる。(10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の性格について考える生徒がいるだろう。 ・部活や趣味について考える生徒もいるだろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・例を提示しイメージマップを作製させることで、イメージを膨らませやすくする。 ・イメージが湧きにくい生徒に対しては友人と相談するよう伝える。
3. 写真を撮影する。(20分)	<ul style="list-style-type: none"> ・写真を撮られるのは苦手だという生徒がいるだろう。 ・様々なポーズを試しながら撮影する生徒がいるだろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・顔の正面からや全体ではなくてもよいと伝え、写真が苦手な生徒も活動に参加しやすいようにする。 ・最終的に1枚の写真に決定するよう伝え、構図を考えながら写真撮影ができるようにする。
4. 本時の振り返りをする。(5分)		

◆自分の特性について考えてみよう！



◆自分の特性から作品の構成を練ろう！



ART

自画像制作

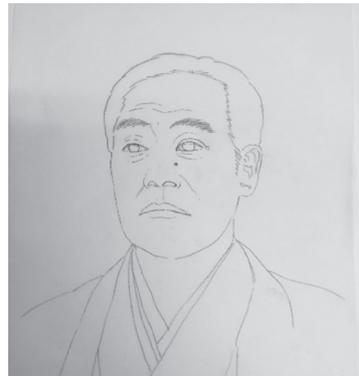


- ①白黒写真の上にトレーシングペーパーを重ねトレースします。
（見えている線全てをトレースする必要はありません。変更しようと思っ
ている箇所・必要ないと感じる線は写さずそのまま残しておき
ます。）



福沢諭吉 肖像

- ②トレースした線に加筆・修正を加えます。
（前回考えた模様、アイテムなどをもとに必要な箇所を描き
込みます。）



- ③トレーシングペーパーの裏を鉛筆で塗り、線をなぞって画用紙に転写
します。
（全面を鉛筆で塗りつぶす必要はありません。写し取る箇所のみを塗
り、画用紙に転写します。）

